

運動の進め方

もし工業の部面でこのように大きな困難にぶつかったとすれば、もしこの部面でわれわれが、労働者統制から労働者管理にいたる道——多くの人々は長い道と見たが、実は短いこの道を経なければならなかったとすれば、もっともおくれた農村では、われわれは、はるかに多くの準備活動をはたさなければならなかった。そして、農村生活を観察した人々、農村で農民大衆と接触した人々は、都市の十月革命は、農村では、1918年の夏と秋によく真の十月革命になったと言っている。そして、同志諸君、ペトログラードのプロレタリアートとペトログラード守備隊の兵士とが権力をにぎったとき、彼らは、農村における建設にさいしてはもっと大きな困難に出あうだろうということ、この部面ではもっとゆっくりすすまなければならないということ、この部面では命令によって、法規によって土地の共同耕作を実施しようと試みることは、このうえなく愚かしいことであろうということ、共同耕作に応じうるのはわずかな数の意識分子だけであって、農民の圧倒的多数はこの課題を提起してはいないということ、よく知っていた。だから、われわれは、革命の発展のために絶対に必要な事がらだけにかぎったのである。どんなばあいにも、大衆の発展に先ばしてはならず、この大衆自身の経験から、大衆自身の闘争から、前進運動が成長してくるのを待たなければならない。われわれは十月には、農民の古い、幾百年來の敵である農奴主的地主、巨大土地所有者をただちに一掃するだけにとどめた。これは全農民の闘争であった。この部面では、まだ農民の内部に、プロレタリアート、半プロレタリアート、貧農部分と、ブルジョアジーとへの分裂はおこっていなかった。この闘争がなければ社会主義はないということ、われわれ社会主義者は知っていたが、同時にわれわれは、われわれがそれを知っただけでは不十分なこと、この知識が、宣伝によってではなく幾百万人の自身の経験によって、この幾百万人のなかに浸透しなければならないことを、知っていた。だから、全体としての農民が平等の土地用益という原則をもとにしてしか変革を考えていなかったころには、われわれは、1917年10月26日付のわれわれの布告のなかで、われわれは土地についての農民要望書を基礎とすると、公然と述べたのであった〔本全集、第26巻、259－262ページ〕。

この要望書はわれわれの見解に一致しないということ、それは共産主義ではないということ、われわれは率直に述べたが、しかし、われわれの綱領に一致しているというだけで、農民の見解に一致しないものを、農民におしつけようとはしなかった。われわれは、革命の歩みがわれわれ自身の達したのと同じ立場に彼らを導くことを確信して、われわれは働く同志としての農民とともにすすむ、と声明したのだが、その結果、われわれはこんにち農民運動を見ているのである。土地改革は、この方策はわれわれの見解に一致しないと率直に述べながら、われわれ自身が、自分の投票によって通過させたあのほかならぬ土地の社会化からはじまった。われわれは、圧倒的多数が平等の土地用益の思想に同意していることを知っていたので、なにごとによらず彼らにおしつけようとはおもわず、農民自身がそれを克服してさらに前進するのを待ったのである。そして、われわれは待ちとおしたし、われわれの勢力を準備することができた。（第28巻『労働者・農民・カザック・赤軍代表ソヴェト第六回臨時全ロシア大会』P142～144、1918年11月6～9日）

…………他方では、もしボリシェヴィキ的プロレタリアートが、農村の階級分化を持つ(待つ?青山)ことができず、また、この階級分化を準備し実行することができずに、1917年10月~11月に、内乱を「布告」したり、農村への「社会主義の導入」を「布告」したり、農民一般との一時的なブロック(同盟)なしに、中農に一連の譲歩をすること等々なしにすませたりしようと即座に試みたならば、それは、マルクス主義をブランキ主義的にゆがめることであつたらう。それは、**少数者**が自分の意志を多数者におしつける企てであつたらう。それは、理論的にはばかばかしいことであつて、全農民の革命は**まだブルジョア革命**であつて、後進国では**一連の過渡や過渡的段階**なしには、これを社会主義革命にすることはできない、ということを理解しないことであつたらう。(第28巻『プロレタリア革命と背教者カウツキー』P325、1918年10月~11月に執筆)

ポイント

どんなばあいにも、大衆の発展に先ばしつてはならず、この大衆自身の経験から、大衆自身の闘争から、前進運動が成長してくるのを待たなければならない。